

【翻
訳】

『エムペドクレスの死』抄

ヘルダーリン作
神子博昭編訳

酔いしれた民衆の騒ぎを背景に

(遠くでアグリゲント市民の歌声)

エムペドクレス

パウサニアス

ヘルモクラテス

メカデス

マーネス

アグリゲント市民一同

弟子

司祭

執政官

エジプトの賢者

舞台はアグリゲント市、のちエトナ山麓

メカデス あのをかれ騒ぎを聞かれたか？

ヘルモクラテス あやつをもとめておる。

メカデス あの男の影響はたいへんなものだ。

ヘルモクラテス わかっておる。枯草のように、みんなの心に火がついた。

メカデス ひとりの男があればほど群衆をうごかせるとはな。ユピテルの稲妻が森をうつようだ。いや、もつとおそろしいて。

ヘルモクラテス だからこそわしらは人間に目かくしをするのじゃ。

あまりに激しく光で身を養わぬようにな。神々しいものを目のあたりにははならん。ひとの心はいのちあふれるものを見てはならんのじゃ。

その昔、天の寵児と呼ばれておったものを御存知かな？ そ

の胸を世界のくさぐさの力で養い、晴ればれ見あげる眼には近々と不死のものがあらわれた。誇り高きそれゆえに、けして頭を屈せず、この強大なものをまえにしては地上のものなどひとたまりもなかった。おのれを持すなぞ、むりじやった。

メカデス で、あやつは？

ヘルモクラテス 神々の皆さまと親しむあまり、あの男の力は大きくなりすぎた。あやつという言葉はみなに耳にはオリュンポスのお告げのように聞こえるじやろうて。みな、あやつに感謝をささげる。天からのちの火をうばい、死すべき身にも分けてくれたというてな。

メカデス みな、あの男のことしか思いつかぬ。あれがみな神であり、王なのだ。アポロの神さまはトロイのために街をお建てくださった。だが高貴のお方に一生涯、力をそえていただけるのはさらに良い、そんなことをいっておる。

あやつについては、まだまだわけのわからぬことをいっておるぞ。そして掟もきまりも必要も、なにひとつ眼中にない。街のものはまるで迷い星のありさまだ。ひよつとしてこれは、あの男が胸中ひそかにあたためている将来の良からぬことのものではあるまいか。

ヘルモクラテス おちつくのじや、メカデス！ そうはいかぬて。

メカデス あやつ以上の力をおもちか？

ヘルモクラテス 力あるものといえども、その男が何者か、知るものの方が強いのだ。あれは稀有の男ではある、じやがわしはよう知っておる。あまりに恵まれた育ちじやった。その心ははじめから甘やかされ、ためにささいなことでもすぐ乱れる。これは償いじや。

あまりに死すべき人間どもを程をこえて愛したからな。

メカデス あれはもう長くない、わしにもそういう気がする。だが事

成り、それから倒れたというのではおそすぎる。

ヘルモクラテス もう片はついておる。

メカデス なんと？

ヘルモクラテス わからぬか？ はや高邁な精神を、精神などもたぬものがまどわしたのじや、めくらどもが誘惑者をな。

魂をあつた男はみなにまにまに投げだした、神々の皆さまのお恵みを気前よく卑しいものにふるもうたのじや。してその報いに、うつろなこだまが死せる胸から、愚かものの猿まねかとひびくばかり。しばしこらえた、身を切られる思いで耐えたのじや。が、わからぬ、

どこがどうまちごうておるかとな。するうちにいよいよ民衆はうかれたった。身をおのかせ、きき耳をたてた、あの男の胸がわれとわが言葉でふるえるのにな。みなはいうた、神々の皆さまからもこんなことは聞けまいぞ！ そうして、わしはあえてそちにはい

まい、ある名を下僕どもはささげたのじや、誇り高く悲しめるあの男にな。するとついに渴きに耐えかね、あの男は毒杯に手をのばす。哀れよの、正気ではいたたまれず、おのれに匹敵するものもなく、

なぐさみとなるのは吹き荒れる崇拜の念ばかり、目くらまされて、みなど同じ腑ぬけの迷信家になりはてるとは。あの男の力はない、夜のなかを迷うておる、いかにしてきりぬけるか、あの男にはわからぬ。わしらなら教えてやれるというものじや。

メカデス それはたしかか？

ヘルモクラテス わしにはようわかつておる。

メカデス あの男がいい気になつてしゃべったことを思いだしたぞ。

最後に広場で見かけたときのことだ。そのまえに民衆に向つてなんといったか、それは知らぬ。ちようど来あわせたところだ。遠く

からわしは聞いていた。

みな、わたしを敬うが、そうあの男は答えていた、それも当然だ。自然はなにもしゃべらぬからな。お日さまも大気も大地も地の子らも生きてはいる、だがおたがい無縁だ、ばらばらで、とても仲間とは思えぬほどだ。つねに変わらず力に満ち、神々しい精神にみなぎりあふれ、自由で不死のくさぐさの世界の威力は、ぐるりと仰のはかないのちをめぐってはいらつしやる。だが神々の皆さまのふところに種まかれ死すべき定めのもどもは、荒地地に生いたつ草木のようだ。養いあまりにわずかなため、この地は死んでいるかと思われよう、もし何者かあり、世話をし手を入れ、いのちを呼びさますのでなければな。

これぞわが畑。わたしのおかげで力と魂はまじりあい、死すべきものらと神々の皆さまもひとつになるのだ。いよいよ温みをおび、永遠の力はあえぎもとめる心を抱きよせ、いよいよ盛んに自由なものらの精神を糧として、感受する心は成長する。

さあ、目ざめよ！ われこそは無縁のものらをなじませるもの。未知のものを言葉で名ざし、生あるものの愛を担い、あちらへ、こちらへとうけわたし、ここに欠けておればあそこにとり、結びつけ、魂を吹きこんで、おもむくところ、歩みためらうこの世界を若がえらせる。わたし自身はだれにも似ず、すべてに似ている。

と、こんなふうに思いあがっていいおった。
ヘルモクラテス そんなのは序の口じゃ。瘻の種子たかがああ男には眠っておる。わしにはようわかる。あやつのように幸せすぎる天の息子のことならな。あやつらは甘やかされて、おのれの魂しかわきまえぬ。

一度ある瞬間がやつらをさまたげ、そのかす——繊細だから傷つきやすいのでな——するともう二度としずめてやることはできん。ひりひりと灼けつく痛みを駆りたてられ、胸はにえくりかえる。この傷につける薬はない。

あの男もそうなのじゃ！ 民衆が氣にくわんようになって以来、どれほど平静をつくるうておつても、あやつのはかつかとしておる。僭主の欲望を抱いておるのじゃ。あやつか、わしらか！ だからあやつを犠牲にしても損にはならん。あれにはほろんでもらわねば！

メカデス おお、あの男を怒らせるな！ せつかくとじこめた炎だ、燃えあがらせずに窒息させよ！ ほつておかれよ！ 口実を与えるな！ きつかけを失い、ためにいい気になってあつかましいふるまいにおよぶことなく、たんに言葉だけの罪ならば、あやつは死んでもただの愚かものというにすぎぬ。わしらにとって害はない。強力な敵こそ真にあやつをおそろしいものとする。よいか、そのときこそはじめておのれの力をさとのだ。

ヘルモクラテス そちはあの男をおそれおる、なにもかもおそろしいのじゃ、哀れよの！

メカデス わしはただ悔いはのこしたくないだけだ。見のがせるものなら、見のがしてやりたいと思うのだ。司祭どのはその必要もない。なんでもお見通しだからな。なにごとく清めることのおおきくなる神聖なお方だてな。

ヘルモクラテス いやみをいうより、わしのいうことを聞け、まだまだ年端も行かぬ男よの！ あの男はほろぶしかない。わしはいうておく。よいか、かぼうてやれるとしたら、そちよりさきにわしがし

ておる。あやつに似ておるのはわしであり、そちではない。じゃが、まあ、聞け。

剣より火よりもさらにあやういのは神々の皆さまの似姿の、ひとの精神、その精神が無言でいられず、こらえきれずに秘密をうちあけてしまうときじゃ。ひそかに深みにひそみ、必要なだけを入れてやるなら、ためにもなるう。だがまちがえばなめつくす炎となる、いましめを破り噴きだすならばな。

失せよ、魂を、また神々の皆さまをむきだしにさらし、向う見ずにもいわくいいがたいことをしゃべりちらし、危険な宝を、まるで水かなんぞのようにつきそこね浪費して平気な奴は。それは殺人以上の罪なのじゃ。それをそなたは、かぼうてやるとな？ ひかえるがよい！ これがあやつの運命じゃ。あやつがわれから招いたのじゃ。あの男のように嘆きと愚かさを絵にかいて生き、ほろぶがよい、神々しいものを明るみにさらし、これを結び、あれをつなぎ、ひそかに統べていらつしやるものを、ひとの手にゆだねるものはな！

冥府におちよ！

メカデス それほどまで高い償いをしなければならぬのか、あふれる魂から最良のものを死すべきものにらにくれてやったというだけで？ ヘルモクラテス 好きなだけやるがよい。じゃが復讐の女神さまはだまっています。大口をたたたくがよい。つつましく口つぐむいのちをはずかしめ、地中に眠る黄金を日のもとにひきずりだすがよい。死すべき身にはとうてい使用の叶わぬものも、使いたければ使うがよい。その男こそまっさきに裁かれるのじゃ——

あやつのははや乱れておるのではあるまいか？ あふれるほどの魂も民衆のもとにいて、こまやかさを失い、いまやささくれだつ

たか？ あれほどなんでもしゃべった男が、いまでは独断にはしるのか？ 寛大であったものを！ なんと無礼な男になりさがったものじゃ、神々の皆さまと人間とおのれの手ぶりほどの価値としか思わぬとはな。

メカデス おそろしいことを口にされるな、司祭どのは。そなたの言葉には闇がある、だが真実であると思える。そうしておこう！ このわしもお役に立てるぞ。ただあれをどうとらえるか、それがわからぬ。どれほど偉大であろうと、ひとりの男を裁くのはむつかしくはない。だが魔法使いよろしく群衆をひきまわし、思いあがっている男をとりおさえるのは、これはまた別のこと、のう、そうは思わぬか、ヘルモクラテス。

ヘルモクラテス その魔法ももろいものよ、まだ見ぬけぬほどおまえは未熟か。あの男はわれとわが手で事を容易にしてくれた。あれの不満が自分に向けられたのは、うってつけじゃ。誇り高い男じゃ、ひそかに憤っているだけで、ただただおのれを仇にするしかない。たとえ権力があっても、そんなもの眼中にない。ひたすら悲しむばかり、おのれの零落を目にするばかりじゃ。失われたいのちを思いだしてはもとめておる。そのおしやべりで追いだした神さまをもう一度呼びかえそうとしておるのじゃ。

みなものを呼んでくれい。あの男を訴えるのじゃ。呪いの言葉をくだしてくれ。自分らの偶像の姿に、みな、驚くじやろうて。あの男を荒野に追放するのじゃ。二度ともどつてはこれぬようにして、そこで償いをするがいい。なんといても程をこえて、死ぬ定め人間にふるもうた男じゃからの。

メカデス しかし、なにをとがめる？

ヘルモクラテス そちがいうたな、その言葉で十分じゃ。

メカデス あんなわずかなことをもとに、それで民衆をあやつの心からひきはなせるか？

ヘルモクラテス その時さえつかめば、どんな訴えもきき目がある。

しかもあの言葉はささいではない。

メカデス 以前にも民衆のまえで、あの男に殺人の罪をとがめたな。

しかもむだであった。

ヘルモクラテス まさにそこじゃ！ あからさまになされたことは許すもの、それが迷信深い連中というものよ。目に見えぬ穢の種子をかこつ姿こそ、連中のいごちを悪くさせるのじゃ！ あいつらの目をうってくれよう。うすのろどもは動揺するて。

メカデス 民衆はあの男を好いておる。その心を封じ、こちらにひいてこようとは、これは容易でないぞ！ あの男は愛されておる！

ヘルモクラテス 愛されておるとな？ たしかにな！ あの男が咲きほこり、輝いているうちは、あやつも楽しめる。さて、みな、どうする、いまあやつは暗く、すさんでおるぞ？ 役立つものはなにもない、退屈をまぎらせてくれるわけでもない。とり入れも終わったのじゃ。野は荒涼として大風とわしらの小道が思いのまま、縦横に通うばかりじゃ。

メカデス 怒らせておけ！ 存分に！ そなたは眺めているだけにするがいい！

ヘルモクラテス むしろこらえてくれればと思うのだ、メカデス！

メカデス こらえる姿は民衆の心をつかむぞ！

ヘルモクラテス とんでもない！

メカデス そなたにはだいたいなものはないのか。そなたも、わ

しも、あやつも、なにもかもほろぼすつもりか。

ヘルモクラテス 死ぬ定め人間が夢見ようが、泡吹こうが、目をかけるつもりは毛頭ない！ あやつらは神さまになりたがり、まるで神さまみたいにお高くとまっているが、なに、それもしばしじゃ！

苦しみこらえる姿を見て民衆は同情するとな、それが気がかりか？

あの男なら愚かものらをそそのかし、わが身に怒りをふりむけさせる。その苦しみを見て民衆は、欺瞞がいかに高かついたか、さとするじやろうて。容赦なく感謝しようぞ、いままで崇拜はされておつた、その実ひ弱な男であったというてな。そうなるのも当然じゃ。

メカデス できたら、これからは手をひきたい、司祭どの！

ヘルモクラテス わしにまかせておくがよい、心配いたすな、これはどうしても必要なのじゃ。

メカデス あそこにあの男が。ひとつ、ためされるがよい。そなたの精神は狂っておるて！ なにもかも失うぞ。

ヘルモクラテス ほっておくのじゃ！ 行こう！

喪失

エムベドクレス

わが静けさのうちにかつてひっそりはいつてこられたな、
 下方の暗い洞窟にわたしのありかを照らしてくれたな、
 親しい光よ！ あなたを待ちうけ

はるか遠く地の彼方の上空に、はやくもわたしは
 感じたものだ、美しい日の到来を、

またなじみのものら、そのはたらきすばやい
 くさぐさの天の力を！ いままた間近におまえらに

まみえれば、変らず幸福な姿をとどめ
 まっすぐそびえる、わが杜の木立よ！

しばらく見ぬ間に大きくなつたな。日ごと天の泉は
 つつましいおまえらを光で

うるおし、いのちの火花をふりまいて
 エーテルは花吹くものらを実らせてくれたな。

おお、内よりあふれる自然よ！ あなたのまえに
 わたしは立つが、さてあなたはどの友を、

最愛のものをもはや認めてはくれぬのか？
 司祭となり、喜々としてそそがれた供儀の血の

いのちの歌をあなたにささげたこの友を？

おお、聖なる泉、ひとしれず

水は湧き、濁くものらを

暑い日盛りにうるおす泉！ わたしにも

このわたしにも世界の底の底から

昔はいのちがほとばしって、濁くものらが

よつてきた——それがいまは

干あがつている。はかない定めの人間すら

もうわがいのちを楽しまない——ひとりぼっちか？ そしていま

この杜では昼なお夜か？ なんと！

死すべき視線が見るよりもっと高みを見た男が

いま盲目にうちすえられ、手さぐりをしてるとは——

どこにいなさる、神々の皆さまは？ 悲しいかな、

乞食のようにわたしをすておかれ？ この胸を、

あれほど皆さまをお慕い申した胸内なのに、つきおとし

地にまみれさせなさるのか？ 窮屈ないまじめにつなぎとめ恥の

思いを与えなさるか、

自由に生まれ、ひたすら

おのれ自身であるものを？ 弱虫のように

わたしに耐えよとおっしゃるか、おどおどと冥府のなかで

くる日もくる日も変りばえせぬ仕事につながらてもいるように？

おのれがだれか、わかっている。そのわたしが望むのだ！ 大気

を
 いれよう、はっ！ 日をのぼらせよう！ 失せよ！

誇りにかけて！ この小道の

ちりにまみれるつもりはないぞ、かつてはここを

行きながら美しい夢を見たというのに——それも昔か！

わたしは愛された、神々の皆さまの愛をうけた。

お声を耳にし、皆さまを知り、ごいっしょにはたらいだ、

いまもわが魂をうごかしていなさる。それほど皆さまとなじみで

あつた、

皆さま、わが心に生きていなすつた——おお、とんでもない！

あれが

夢であつたとは。心臓に感じていたのだ、

静まりかえるエーテルを！ はかないのちの迷いに

魂がとらえられ、愛ゆえに傷つくとき、この胸を

吹きめぐり、そして癒し

なだめてくれたエーテルよ！ またこの目で見たのだ、

神々しい力のはたらきを、はぐくみ育てる光であつた！

またくさぐさの永遠の威力をも——

おお、影法師め！ もうすぎたことだ、

おまえも自分にかくさぬがいい！ おまえ

自身のせいなのだ、哀れなタンタルスと同じなのだ、

神聖を汚し、

あつかましく誇り顔に、たいせつな絆をちぎってすてた

みじめな男よ！ 世界の霊が

愛情にあふれおまえの心に安らつていたというのに、おまえは

ただおのれを意識し、哀れな愚かものめが、

霊の寛大さをいいことに、こう思いこんだのだ、

この天上のものらも下僕となつて仕えるはずだ、と！
罰してくれるものはおらぬのか、

では手ずから呪いと嘲りを

わが魂に呼びよせるのか？ さっとひとふり

デルポイの王冠をこの頭から払つてくれる

すぐれたものはおらぬのか、この巻毛をばつさり切りおとし

禿頭の予言者とはだれもしてくれぬのか——

(パウサニアス登場)

パウサニアス おお、天の皆さま、なんとしたことでしょう？

エムペドクレス よるな！ だれがおまえをよこしたのだ？ わたし

のところまでひと仕事したいのか？ わからぬことがあれば、すつか

りいつてきかせてやる。それにならつて自分の仕事をはたすがよ

い——

パウサニアス！ おまえが心にかけていた男をここに探すな。そ

んな男はいないのだ。いい子だから、向うへ行つてくれ！ おまえ

の顔を見ていると心が乱れる。祝福であれ呪いであれ、おまえの口

からでるものは重荷なのだ。

いや、まあ、好きにするがいい！

パウサニアス どうなさつたのです？ 長いあいだ、ここでお待ちし

ておりました。遠くからお姿を拝見して、日の光に感謝したほどで

ございます。ところが高貴なお姿が！ ああ！ なんと、ゼウスさ

まの雷いかづちにうたれなさつた櫂のように、頭からつま先までうちくだ

かれた御様子で。
おひとりでしたか？ お言葉そのものは聞こえなかつた、それでも
も異様な死のひびきがしたのですが。

エムベドクレス それはな、かつてわが身をはかない人間以上のものと称えた男の声なのだ。自然は心が広いので、あまりに幸福をさずけすぎたというわけだ。

パウサニアス この世のあらゆる神さまと心を通わせなさっても、あなたさまのようなお方なら分際をすぎたことではありません。エムベドクレス そうわたしも自分でいったな、たしかにそうだ。だがそれは神聖な魔法がこの精神からぬけておらず、わたしが愛情こまやかで、いまだ世界の諸々の霊に愛されておったときのことだ。

おお、天の光よ！——わたしはこれを

人間どもに教わったわけではないぞ——しかもとうの昔、

心急いでも、いのちあふれるものの姿を

見つけられぬあのころでも、あなたに向きあえば、

草木のようにあなたを信じ

敬虔な思いに満たされて、わけもわからずじつと心をよせていられた。

清らかなものを見分けるのは死すべき身にはむづかしいのでな。

しかしあなた自身が花ひらくように、わたしにも精神が花咲いて

いまやわかった。わたしはさげんだ、あなたこそ生けるもの、と。

そしてあなたが晴ればれと死ぬ定めのものらをめぐり

天上の青春をふりまいて、ものみなに

やさしい輝きをそそぎだす、

と、なにもかもあなたの精神の色どりをおびる、

そのようにわたしにもいのちは詩となった。

あなたの魂がわたしのなかに生きていたのだ。それゆえ、ためら

うことなく

あなたにない厳肅な大地に、

悩める大地に心をひらき、聖なる夜には

誓ったものだ、死にいたるまで

運命の大地を愛し、ひるまず忠実なおのれであろう、

また大地の謎はなにひとつゆるがせにはいたすまいと。

すると杜はそれまでにない葉ずれの音をたて

山々のわき水はなつかしいひびきとなった。

おまえの喜びすべてを、大地よ！ それはおまえが

微笑をうかべ、かよわいものらに手わたすようなものでなく、あ

るがまま、壮麗にして

熱をおび、真実で、労苦と愛から熟してきた喜びだ——

その喜びすべてをおまえはくれたな。そしてしばしば

はらかな山の高みにすわり、思いにふけり

いのちの神聖なさまよいに驚きの目を見はり

おまえの転変に深く心をゆすられるとき

ひるがえってわが身の運命を予感した。

するとふいにエーテルがおまえに、

またわたしに吹き通い、愛ゆえに傷ついたこの胸を癒してくれた。

不思議にもエーテルの深みへと

わたしの謎はとけていった——

パウサニアス そのような幸福をおうけになって！

エムベドクレス それがわたしだったのだ！ おお、かつてどうであ

ったか、いえればよいのだが、言葉にできたらいいのだが——壮大

な霊の力の転変とはたらきを、おお、自然よ！ かつてあなたの仲間であった、このわたしがもう一度、魂に呼びもどせたらどんなにいいか！ そうすればおしだまり死にたえたこの胸も、あなたの音色でひびきだそうに。

あの同じわたしなのか？ おお、いのちにかけて！ あなたの歌が翼をふるい、そのまわりにざわめいたのは、わたしだな？ 太古からのあなたの調和に、耳すましたのもわたしだな？ 偉大な自然よ！ ああ！ こんなにも見すてられて。いったいわたしは聖なる大地と、この光と、そして、おお、父なるエーテル！ 魂がかたときも忘れたことのないあなたといっしょに、また生けるものすべてといっしょに、ひとつのオリュンポスに生きていた身ではないか？――

それがいまは泣いている、まるで追放されたものようだ。そしてどこにも足をとどめようとは思わない。

ああ、おまえともいまや縁が切れた――なにもいうな！ 神々が去れば、愛も死ぬ。おまえにもそれはわかろう。だからわたしをほっておいてほしいのだ。わたしは昔のわたしではない、おまえとはなんのかかわりをもたぬ身だ。

パウサニアス あなたさまは同じです、以前と変りはございません。いえ、どうかいわせてください。そんなにも御自分をいやくなくさって、わたしにはわけがわかりません。

あなたさまの魂は眠っていなさるだけだと思います。あれほど世にうちこみなすったのですから、当然そうした時期もおありでしょう。それはちやうどあなたさまの愛していらっしやる大地が、ときに深い休息につくのと同じです。だからといって大地は死んだので

しょうか？ ただ安らっているだけです。

エムペドクレス なんとけなげに慰みを思いつくな！

パウサニアス 未熟者をお笑いでしょう。わたしがあなたさまの幸福を同じようには感じとれず、あなたさまが悩んでらっしやるというのに、調子はあなたさまの事業のうちに、お思いのことでしょう。

わたしはあなたさまの事業のうちに、お姿を認めたではありませんか？ 荒けずりな国家があなたさまの手から形と意義とを獲得した日のことです。その権力にわたしはあなたさまの精神を、その世界を見たのです。

あのとき、あなたさまのただひとことが、わたしにとり幾年もの生きる意味を示してくれて、しばしばそれは神聖な瞬間でした。そのときから青年に美しい時代がはじまったのです。

太古の世界の幸福についてお話しなされると、この心臓はしょっちゅうおどおどしたものです。まるで遠くで森がざわめき、故郷のことを思いださせる、と餌づけの鹿はそわそわしだす、そんなぐあいでした。

それにあなたさまは未来の偉大な輪郭を描きだしてくだすった、ちやうど手足を補い、完全な像にしあげてくれる眼差し確かな芸術家のようなものでした。

いったいあなたさまには人間の運命がおわかりではなかったのですか？ さまざまな自然の威力をお知りになり、これはなん人もまねできませんが、それらの力を思いのまま、信頼しきって、さばかれていますのではありませんか？

エムペドクレス もうよい！ おまえにはわからないのだ、その一言ひとことがとげとなつて、どれほどわたしを刺すことか。

パウサニアス そんなに憂うつに、なにかも憎む必要があたりでしようか？

エムペドクレス おお、理解できぬことは敬うものだ！

パウサニアス なぜわたしに、それほどかたくなにおなりです、苦惱を深めて解けない謎となさいます？ どうか！ これほどつらいことはございません。

エムペドクレス して、パウサニアス！ 苦しみの謎を解こうとするよりつらいことはないのだ。それがわからぬか？ ああ！ わたしのことやこの悲しみは知らぬほうがいいのだ。

いや、いや！ あれさえ口にしなければな、聖なる自然よ！

乙女のように初々しいあなただから、粗雑な心にはとらえられない！ わたしはあなたを侮った、おのれを主人にすえたのだ、思いあがりもはなはだしい蛮人よの！

清らかで、いつまでも若々しく、喜びのうちにわたしを育て、至純の幸福で大きくしてくれたくさぐさの力よ！ いつも同じ姿で帰ってくる、そのつつましさをいいことに、あなた方の魂など気にとめもしなかった、善良な皆さまでありますもの！ わたしは知りつくし、学びつくした、自然のいのちを。ではどうしてそれが以前と同じに神聖でいられよう！ 神々の皆さまはひたすら仕える身になりさがり、わたしひとり神であった。そうしてあつかましくも高慢に、あの言葉を口にしたのだ。

おお、聞け、わたしなど生まれぬほうがましだったのだ！

パウサニアス なんと？ たったひとことのために？ どうしてそう気おくれなさいます、大胆なあなたさまでありますものを！

エムペドクレス たったひとことというのか？ そうだ。神々の皆さま

まはわたしを粉々にされればいい、わたしを愛されたのと同じようで見合いにな。

パウサニアス 他のひとならそうは思わないでしょう。

エムペドクレス 他の奴ら！ あいつらになにができる？

パウサニアス たしかに、あなたさまは人並みはずれたお方ですから！

これほど親密に永遠の世界を、その霊と力をこらんなったのは、あなたさまをおいてはいらっしゃいますまい。だからこそその大胆な言葉をお口にできたのです。だからこそひとことの高慢なせりふのゆえに、これほどに神々の皆さまからひきさかれたとお感じなさり、愛のあかしにわが身を犠牲になさるのです、おお、エムペドクレスさま！

エムペドクレス や！ なにごとだ？ ヘルモクラテス、司祭ではな

いか。それに民衆もついてくる！ 執政官もだ。なにをしにやってきたのだ？

パウサニアス みんなずっと、あなたさまがどこにいらしたか、探していました。

和解

〔アグリゲントの市民は司祭と執政官にそそのかされ、街からエムペドクレスを追放する。エムペドクレスはパウサニ阿斯とふたり、エトナ山のみもとにいたる。追放はかえって彼に幸いした。大空のもと、エトナの荒蕪の地でエムペドクレスの苦悩は癒える。彼は天地とひとつになる、大いなる死を決意する。そのとき後悔して、あとを追ってきた市民らが司祭、執政官とともにあらわれる。ひととき司祭とエムペドクレスとのあいだに激しいやりとりのあったのち、司祭の口を封じて市民らはエムペドクレスに許しを請う。〕

（エトナ山のみもと）

エムペドクレス（司祭を責める市民らに） 陽は傾き沈んで行く。夜びいて先を急がねばならぬのだ、わが子らよ。もう司祭は放してやれ！ 争いに時間をとりすぎた。おこったことは、すぎるにまかせよ。これからはおたがい安らかでいられよう。

パウサニ阿斯 ではなにもかもこのままでよろしいと？

アグリゲント市民三 おお、もう一度われらに心をおかけください！
アグリゲント市民二 アグリゲントにもどられ、おくらしくください。

あるローマ人が申しました、ヌーマ・ポンピリウスのおかけをもつて、われらは偉大とはなった。どうか神さまのようなあなたさま

ですから、われらのヌーマになってください。長いこと考えていたのです、あなたさまに王になっていただきたい。おお、どうか！
そうなさってください！ わたしがまず王さまにあいさつします。
みんなの気持ちも同じです。

エムペドクレス 王の時代ではもはやない。

市民一同（驚いて） ではなんでしよう、あなたさまは？

パウサニ阿斯 王冠はいらぬとおっしゃるのだ、みなさん。

アグリゲント市民一 そんなことをおっしゃるとは、わけがわかりません、エムペドクレスさま。

エムペドクレス 驚はひなをいつまでも巢に囲っておくか？ 目が見

えぬうちは、世話もしよう。その翼に抱かれてまだ羽の生えぬものどもは、うつらうつら、夢うつつの甘美ないのちのときをもとう。

だが陽の目を見、十分強く羽はたけるようになれば、ひなはゆりかごから放りだされる。自分で飛ばなくてはならぬのだ。

まだ王を戴こうと思うとはな、恥じるがいい。もう十分すぎるほど年経たおまえらだ。父親の代なら話はちがっておつたろうが。いま助けとなるのはだれもおらん、自分で自分を支えねばな。

メカデス すまなかつた！ 天上の皆さまにかけていおう！ 裏切られたというのに、そなたは偉大だ！

エムペドクレス 袂を分つた、あれは悪しき一日だった、執政官のおまえにもな。

アグリゲント市民二 お許しください、どうぞいっしょにお帰りください！

故郷の太陽はなんといっても他のどこよりやさしく照らします。あなたさまにこそふさわしい権力ですが、お望みでないとあれば、

まだまだ別の贈り物を荣誉のしるしにささげましょう。緑の葉は花輪に編み、美しい名前をそえましょう。永遠に古びない青銅で柱をお立てしてもさしあげます。

おお、おもどりください！ 街の若者どもは、あなたさまを侮辱しませんでしたから清い身です、その若者らに任せます——ただ身近にいてくださる、それで十分です。わたしどもをお避けになつても、一同こらえます。そうすればお庭のなかでひっそり、おすごしになれるでしょう。やがて御身におこつたことも忘れていただけるかと存じます。

エムペドクレス おお、もう一度！ わたしを育ててくれた故郷の光よ、わが青春と幸福の庭よ、またおまえらも忘れまい、名誉をうけたあの日々よ、このものらと心ひとつで、わたしが純真、なんの汚れもなかった日々よ。それらにかけていおう、もう一度われらは和解したのだ！——

いまはそつとしておいてくれ。そのほうがいいのだ。一度はずかしたあの男の顔は、もう目に入れぬほうがおまえらのためだ。そうであればその男を愛したことだけをおぼえていられる。おまえらの心もくもらず、千々に乱れることもなからう。永遠の青春のまま、わたしの姿はおまえらと生きる。はなれてこそ喜びの歌も甘美にひびく、かならずやうたつてくれると約束したな。

おお、別れのとぎだ。愚かさよと老いがわれわれを分かつまえにな。あれは警告だった。だが正しいときに自ら別れを選ぶものらは、心はひとつだ。

アグリゲント市民三 わたしたちが途方にくれても？
エムペドクレス おまえたちは王冠をさしだしてくれな！ 神聖な

遺言を、かわりにうけとれ。

長いあいだ、いわずにおいた。晴れた晩、美しい世界が頭上にひらける、と満天の星々のもと聖なる息吹が精神をつたえ、喜ばしい思いでわたしをつつんだ。するとひとときわ胸おどつたものだ。夜が明けたら、そうわたしは思った、永く秘めた厳肅な言葉をみなに告げよう、とな。そしてうれしさに急ぐ思いで金色の朝雲を東の空に呼びたてた。その日こそ新たな祝祭、わが孤独の節回しにみなも和し、ひとつの喜びの歌となるはずだった。

だがいつも心はふたたびとじた。時を待ち、さらに熟すべきだったのだ。

きょうこそは実りの秋、果実もうれ、おのずとおちる。

パウサニアス おお、もう少しまえに、おっしゃってくださいれば。こうしたといっさいが、あるいはおこらなかつたでしょう。

エムペドクレス

途方にくれさせはせぬぞ、

たいせつなおまえらをな！ だが、ひるむでない！ 大地の子らは

新しく見慣れぬものをいとうもの、

ひたすらいまいるところにとどまりつづける、

それが草木のいのち、満ち足りた獣というものだ。

おのれのみ心にくだき

生きぬく算段、それ以上思いをこらす

いのちではない。だがついには

おすおすとはいひだすことになる。死の手にとらわれ

地水火風に帰って行くのだ。それはしかし

新たな青春に浴みして

よみがえるときでもある。人間には大いなる喜びが
恵まれている、われとわが身を若がえらせることができるのだ。
それこそは浄めの死、

ただしいときに自ら選んだその死のなから

ステュクスの冥府の水をあびたアキレスさながら、諸々の民はよ
みがえる。

おお、身を自然にゆだねよ、とらわれるより早く！——

おまえらは久しく並はずれたものに渴いていた、

病む肉体をぬけだすように、アグリゲントの

精神は古い軌道を去ろうとしていた。

されば、去るがいい！ おまえらがうけつぎ、ひきつぎ、

父らの口の語りおこし、つたえたもの、

法に習慣、古き神々の皆さまの御名、

それらいつさい、いさぎよく忘れよ、生まれたばかりのものとな

って

神々しい自然をふりあおぐのだ。

すると精神は天の光に

燃えあがり、甘やかないのちの息吹は

おまえらの胸を初々しくうるおそう。

金色の果実に森の枝はさわさわ鳴り

岩間には泉も湧きでよう。宇宙の

いのちが、その安らぎの精神がおまえらをとらえる、それこそ

聖なる子守歌、魂を静める歌だ。

ふと美しい薄明の悦びのなから

大地の緑がいまさらながら輝きだす、

山も海も雲も星も

気高き威力も、みんなみな英雄の兄弟さながら

おまえらの目に映える、おまえらの胸は

武器とするものの胸、行為めがけ、

美しい世界めがけて高鳴ろう。いまこそたがい

手をのべるとき、言葉を交し、もてるものをもにするのだ。

おお、愛するおまえたち、行為と名誉を分ちあえ、

誠実なディオスクロイのふたごのように。一人ひとり

みなに通うのだ——しなやかな柱を思わせ

ただしい秩序のうえには新たないのちが安らつて

その絆をかためるものこそ掟であれ。

そうしてこそ、おお、変転常なき自然の

霊の皆さま！ 晴れやかな皆さまをお招きします、

深みから、高みから喜びをとりだされ

労苦にも幸いにも日の光にも雨にもませて、その喜びを

狭くとぎされ、はかないいのちの心臓へ

彼方ひと知れぬ世界からとどけてくださる、その霊の皆さまを

とらわれない民衆は祭りの日にお呼びします、

そして心からお迎えます！ つつましく！ なつかしく思うゆ

えに

最上のものをひとはさしだし、その胸が

かたくとぎされ、下僕のようにへつらうこともないのです——

パウサニアス おお、父うえ！

エムベドクレス さらば！ これは死すべきひとの言葉であつた。このひとときをいとおしきゆえに、おまえらと神々の皆さまとの間にとどまつたが、すでもう召された身だ。別れの日には精神は予言するもの、もう二度ともどらぬものは真実を告げて去るのだ。

メカデス どこへ？ おお、そなたは老いて盲いたわしの目をもう一度ひらいてくれた、その目が見た生きいきはたらくオリュンポスにかけて、どうか行かないでくれ。そなたがそばにいればこそ民は榮え、新しい魂は枝となり果実となる。

エムベドクレス わたしが去つてもかわりに天の花が、吹きほこる星が、大地から千度も芽ぶき、語つてくれよう。神々しい姿を見せる自然には言葉はいらぬ。そして自然は、一度身近になつたおまえらをしてはおかぬ。あらわれのその瞬間は消しがたいものなのだ。天の炎はあらゆる時代をつらぬき、祝福し、力をおよぼし、勝利をもたらす。

やがて幸福てるサトゥルヌス神の、いつそう雄々しい新たな日々が訪れよう。そのときすぎ去つた時代を思つてくれ。そのときこそはつらつとした精神に温められ、遠い祖先の伝説よ、よみがえれ！ 春の光の歌声にさそわれたか、英雄の古き世界よ、忘却のさなからより祭りの庭にかげりをおびて、うかびあがれ。されば金色の喪の雲を身にまとい、昔の記憶が喜びあふれるおまえらをつつむだらう！

パウサニアス あなたは？ あなたさまは？
ああ、こうした有頂天の人々をまえに、これを口にするのはつらい。これからどうなるか、このひとたちは思いもつかぬ。いいえ！ そんなこと、なさつてはなりません。

エムベドクレス おお、なんたる願い！ おまえらはこどもだ、それ

にもかかわらず正しいこと、合点の行くことを知りたいと思うのだな。まちがっていらつしやる、そうおまえらより権力のあるものにするのだな、愚かなことだ！ だが役に立つまいぞ。このいのちは星のようにとどめがたく、完成の道をすすむのだ。

おまえらは神々の皆さまの声を聞かんだか？

まだ父母の言葉に耳すまし、おぼえるまえのことだ。はじめの息、ほんの一瞥で、はやくもわたしは神々の皆さまをそれと悟つた。以来いつもその声は人間の言葉より尊かつた。

昇り来よ！ そう声は聞こえた。どれほどかすかなそよ風も不安なあこがれを強くゆすつた。もし地上にこれ以上とどまるなら、それはまるで若いものが空しくこどもの遊びにうちこむようなものだろう。はっ！ 下僕と同じく腑ぬけとなつて、おまえらと神々の皆さまの見ているまえで、夜のなか、恥辱のなかをさまようことになるだろう。

わたしのいのちは終つたのだ。

稍から花びらがそそぎ、暗い土から金色の果実や花や小麦が萌えでるように、苦痛と苦悩のきわまるころ、わたしに喜びが訪れた。おだやかに天の力が舞いおりて、深みにたたえられたのは、自然よ、あふれでるあなたの高み、そしてあなたの喜びだった。みなわたしの胸に安らい、より集つてひとつの至福となつた。そうして美しいのちに思いをこらして、神々の皆さまに心から願つたのはただひとつ。

やがてこの神聖な幸運もはや青春の力で担いきれず、よろめくとき、昔の天の寵児のように、この精神も空しく愚かになるならば、そのときこそ警告してくださるように。たちまちこの心臓に、思

いもうけぬ運命を送ってくださいるようにな。

これはしるしだ、浄化の時を告げるものだ。ふさわしいときにこころを去り、新たな青春によみがえり、人々のあいだにあって神々の皆さまの友たる男が、嘲りと戯れと、怒りの的にはならぬようにな。

神々の皆さまは約束を守ってくださいました。強烈な警告だった。一度きりではあった、しかしそれで十分だ。もしこれでわからぬようなら、わたしは愚かな駄馬だろう。拍車では足りず、やむなく答がふりおろされるのを待っているというのだからな。

だから、もどってくれとはいってこれるな。この男はおまえらを愛しはした。しかしともいっても無縁のもので、ただいつときのことだ。おお、そうした男におのれの聖なる由来や魂をすて、死すべきもののために生きのびてほしいとは、願ってくれるな！

美しい別れの時も恵んでもらえたではないか、最後にわたしのものつともたいせつなものを、この心を胸からとりだし、くれたではないか。だからもういな！ おまえらのそばにいて、わたしになにができる？

神々しい自然が神々しく、人間の姿をとおしておのれをあらわすことがある。するとはじめて暗中模索の種族全体も自然を知る。だが告知したのは、自然の無上の悦びに心あふれさせているとはいえ、死すべきいのちの人間なのだ。おお、だから自然がそのうつわを毀つにまかせがいい。それが別の用途にもちいられ、神々しいものがひとのわざに堕ちてはならぬ。

幸福なものらを逝かせてくれ。いつかはそのものどもも専横、卑小になり、恥辱にまみれる、そのまえに自由な心でふさわしい時を

選び、愛ゆえに神々の皆さまに身をささげさせてくれ。

三八

わたしがそうなのだ。おのれの定めはよくわきまえている。若いうちから自分にいつてきた。どうかそれを敬ってくれ！そして明日わたしの姿を見かけなくとも、こういつてほしいのだ。あの男は年老い、日数をかぞえ、憂いと病に身をさらすわけにはいかぬのだ。

ひと知れず去り、だれひとりその男を葬ったものはない。その灰を見た目もない。というのも晴れやかな真昼、きわまるころ死であるような喜びのひとつに神々しいものがヴェールをぬいだ、そうしたいのちにはそれ以外はふさわしくないからだ――

その男を光と大地も愛した。その精神を呼びましたのは、光をも大地をもつつむ世界の精神だ。そこへわたしも死んで帰る。

メカデス なんとしたことだ！ そなたはわしの口など封じてしまふ、なんたることか！

そなたの身におこることは尊重しよう。なにがおこるか、それもいうまい。おお、こうなるしかなかったのか？ なにもかもあまりに早い展開だ。そなたがまだアグリゲントで静かな力をふるっていたころ、わしらはそれに気づかなかんだ。気づいてみると、そなたはもうわしからひきはなされてしまっている。喜びは、きては去る。しかし死すべき身にはままたらない。精神は知らぬ間に、おのれの小径を急ぎ行く。ああ！ そなたがいたのも今は昔だ、などとどうしていえよう？

(皆、退場)

エムペドクレス(ひとり)

はっ！ いましめ解くユピテルの神さま！ いよいよ時が近づきました。山あいから

はや夜のねんごろな使者、

夕べの風が吹きよせ、あなたの愛を告げています。

いよいよだ！ 時は熟した！ おお、脈うて、心よ、

血潮は波立て。精神は

それでも頭上に星となって輝いている、

住み処を定めぬ天の雲が

すぎ去りがてにかすめてとおる、その星のようにな。

どうしたことか？ 奇妙なものだ、まるで

ようやく生きはじめたようだ。すべて変った。

いまはじめてわたしはいる、生きている——ではこのためだったか、

つつましく安らかにくらししていたころ、あれほどしばしば

憧れが無為なおまえをおそったのは？

おお、おまえのいのちが軽くなり

超克の歎びすべてを

ある全き行為について見出す、そんな気になったのも、このため

だったか？

いぎ。死のなかへ？ 暗闇へは

わずか一步。しかも見んものと思うのか、わが眼まなこよ！

よく仕えてくれた、おまえの役目は終ったのだ！

いまやしばし夜がわたしの

頭をかげらす。だが喜びあふれるものがある、

気負う胸から炎が湧くのだ。この願いを思うと

総毛だつ！ なんと？ 死において、わが

いのちはついに燃えたつ？ そしてあなたが

恐怖の杯を泡だたせ、手わたしてくださいすのも、

自然よ！ あなたの歌い手がここぞとばかり

最後の靈感を飲みほすためか！

よろしい、満足だ。いまは

犠牲の庭をもとめるのみ。心は安らかだ。

おお、虹よ、おちかかる

水のうえ、波しぶきが銀の霧となり

とびちるとき弧をえがくおまえの姿、それがわたしの喜びだ。

白鳥の歌

四〇

マーネス さあ！ ぐずぐずするな！ なにを考へることがあろう。

消えよ！ 消えよ！ やがて騒ぎもおさまり、見通しもきこう、しよせん幻なのだ。

エムペドクレス なに？ いったい、どうして？ あなたはどなたか、見知らぬ方だが！

マーネス おまえと同じく哀れな種族の一員で、死すべきものじゃ。

ちようど頃合を見はからつて、天の寵児と自負するおまえに、天の怒りを、神の怒りを、それがけつして徒あたではないと、思いださせてやろうというわけじゃ。

エムペドクレス はっ！ あのお方を御存知とな？

マーネス ナイルの岸辺でいろいろいつてやつたな。

エムペドクレス ではあなたか？ あなたがここに？ それも不思議はない！ 生者にとつてわたしは死んだ、だから死者がよみがえるのだ。

マーネス 死者なら問うても話しはせぬわ。じゃがひとことほしいとあらば、聞くがよい。

エムペドクレス わたしを呼ぶ声なら、すでに聞いた。

マーネス こんなふうにおまえと話したか？

エムペドクレス いったいなんの話だ、あなたはよそのものではないか！

マーネス たしかにな！ わしはこの、こどもらにまじつては異邦人じゃ。ギリシア人はみなこどもじゃて。以前にもいうたがな。じやが民のもとでおまえがどう迎えられたか、それをきかせるつもりはないか？

エムペドクレス なにをいいたい？ なぜもう一度わたしを呼びとめる？ この身におきたことは、そうなる定めだったのだ。

マーネス とつくにわかつておつたわ。おまえにもいつてやつたな。エムペドクレス なら、いいではないか！ なぜいまさらひきとめる？

なぜ神の炎でわたしをおどす？ あのお方ならわたしも存じておる、その戯れに喜んでお仕え申しているのだ。なぜ盲のあなたが、神聖なわが権利を裁くのか！

マーネス おまえの身にふりかかること、それはわしにも変えられん。エムペドクレス だからどうなるか、見にきたというのか？

マーネス おお、冗談をいうときではない、おまえの祝祭を敬うがよい。その頭を花輪で飾り、粧いせよ、犠牲の獣がたおれるのも徒あたではないのじゃ。死は突然おとずれようとも、じつは知つてのとおり、おまえのような無分別ものにも、はじめからきめられておつたからの。それが望みじゃから、そうなるがよい！ じゃが、いまのように無慮のまま去つてはもらうまい。ひとこといつておく、よう考えて酔いをさませ！

ただひとりのお方だけがそうするのが正しいのじゃ、この時代に
はな、

ただひとりのお方を高めるだけなのじゃ、おまえの黒い罪はな。それはわしより偉大なお方じゃ！ というのもぶどうのつるが

地と天の証しにと、高貴な陽ざしを

たつぷりあびて、ほの暗い大地から萌えでるように、

そのお方も光と夜からお生まれなさって、大きくなられる。

あたりの世界はふつふつとわきかえり、なにかしらただ

うごめき、ひしめく、死すべきものらの

胸のなかでは腐爛する定めのもが奥底からあおられる。

時代の^{まゝ}御自分の支配に不安になられ

玉座から暗い視線を反乱にそそがれる。

主の日は消える、稲妻が閃めく、

じゃが天の炎は燃えたたすのみ、

地からはげしく迫るものは、すさんだ憎悪をもたらすのみじゃ。

してひとりのお方こそ新たな救い、

天の光を悠然と把握し、愛するゆえに

死すべきいのちをおのれの胸に抱きよせる、

するとふと世の争いはおだやかになる。

人間と神々の皆さまをそのお方が和解させ、

こうしてまた昔のようにみな近しく生き、むつみあうのじゃ。

してひとたびあらわれるや、息子が

親より偉大にならぬようにと、また

聖なるいのちの精神がいましめられ

そのお方、唯一者のおかけで忘られることのないようにと、

しりぞかれるのじゃ、時代の偶像のそのお方はな、

また手ずから、清らかな手によって

清らかなものにおこるべきことがおこるようにと、

おのれの幸福を破るのじゃ、あまりにすぎた幸福というわけだな、

そしておもちのものを、かつてはそのお方を輝かした

地水火風にいっそう浄めて返されるのじゃ。

おまえがそのひとか？ そのお方なのか？ そうなのか？

エムペドクレス その暗い言葉を聞いて、あなたがわかった。なにこ

とも御存知のあなただから、わたしが何者か、知っておろう。

マーネス おお、いうてみよ、おまえはだれじゃ！ またこのわしは？

エムペドクレス この期におよんでなおわたしをためすのか、わが悪

しき精神よ、このようなときにくるとはな？ どうして静かに行か

せてはくれぬのか、なんたる男だ？ ここでくつてかかり、わたし

をあおり、怒り狂って神聖な小道を行かせるつもりか？

まだこどもではわからなかった、しかしなにかが

目のまえで昼日なか、見知らぬ姿でうごいていた。

不思議にも、偉大な

この世の姿が喜々としたいのちで

胸のなかの、なにも知らずとうと眠るわたしの心をつつんでく

れた。

するとよく、流れる水音にも驚いて耳すませ、

また陽ざしが花吹き、それにふれ

静かな大地に青春の日が燃えたつのを見つめたものだ。

そのときだ、わたしに歌が生まれたのは。ほのかな心も

詩の祈りに明けそめた。

それは見知らぬ眼前の方々を、

自然の神々の皆さまを御名でお呼びしたときのこと、

精神が言葉のうちに姿をあらわし

至福にもそのなかで、いのちの謎もとけていったときのことだ。

そのように人知れず育っていった、だが別のものが

すでに待ちうけていたのだった。というのも水音より

もつとはげしくわが胸をうったのは

荒々しいひとの波。迷妄のさなかから

哀れな民衆のあげる声^{こゑ}が耳にとどいた。

そしてお堂のなかにすわっていると、

真夜中、荒ぶる嘆きが外におこり

野をはしり、いのちに倦んで

われとわが手で家屋を壊し、

寺院を汚して廢墟となした、

兄弟は顔をそむけ、愛しあうもの同士

行きがちがい、父は

息子をみとめず、ひとの言葉はもはや

通じず、掟も失せた、

そのときふと思つてぞつとした、

これは神が民衆を去るしるしなのだ！

そのもの音をわたしは聞いた、そして無言の星空を

見あげたわたしは落ち行くお姿を目にとめた。

神さまをなだめんもの^{なだめんもの}とわたしはでかけた。まだわれらには

美しい日々がのこされており、ついには

若^{わか}がえるものと思えたのだ。そして

黄金時代を、心許しあつたあの時代を、

おぞましい不満は民衆の胸を去り、

自由で堅固なちぎりをわれらも結び、

生き生きとした神々の皆さまもお呼びした。

ところがよく、みな^{みな}の感謝がわたしを飾り、

いよいよわたしに、わたしだけに

民衆が心をよせだすと、ぞつとしたわたしだった。

というのもひとつの国が死に行くとき、精神は

終りにあたつてなおひとりを選び、その口をとおして

白鳥の歌を、最後のいのちをひびかせるものだから。

それはわかつておつた。だが喜んで仕えるわたしだった。

事は終わった。死すべきものには、もはや

わたしは属しておらぬ。おお、最後の時よ！

おお、精神よ、われらを育み、ひそやかに

明る^{あきら}い昼にも雲のなかでもしろしめす精神よ、

また、おお、光よ、そして母なる大地よ！

ここにわたしはおります、心は安らかです、と申しますのもわた

しを待つ

新たな時刻はとうにととのえられていたからです。

姿かたちはもはやとらず、いつも

死すべきもの^{しべきもの}らにはそうであるが、短い幸福にあらわれるのでも

ない、わたしが

生き生きしたものを見つけるのは死のなかだ。

そしてきょうのうちにもあのお方にお会いできる、まさにきょう

時代の主^{きよ}は祝祭の

あたりの静けさがわかるか？ 眠りもやらぬ神の、無言の言葉が聞きとれるか？ ここで待つがいい！ 真夜中にわれらのために事をしあげてくれるだろう。

あなたが自分でいうとおり、雷いかづちの神さまの友であり、あのお方と心はひとつ、その精神は道をわきまえ、神さまとともに歩むのなら、わたしといっしょにくるがいい。いまや孤独のあまり、大地の心が嘆きうったえ、太古の和合を忘れかね、暗い母は炎の腕をエーテルにさしのべる、と主なるお方も光の束に姿をあらわす、そのときだ、われらがそのお方に近いことのしるしにと、聖なる炎におどり入るのは。

だがむしろはなれていたい、わが身がかわいいと思うなら、なぜわたしをさまたげる？ これは自分の領分でないからとて、なぜとりたててじやまをする！

おお、守護霊の皆さま、わたしがなにかはじめるはずぐそばにいてくださった、彼方へと思いを投げかける皆さま方！ 感謝の念でいっばいですが、皆さまに長々とした苦しみのひとつづり、それをここで終らせ、他の義務は解いていただき、神々しい掟のままに自由な死におもむかせてもらえるからです！

これはあなたには禁断の果実なのだ！ ここを去られよ、ついてこられぬとあらば、わたしを裁くな！

マーネス 痛みが精神を熱くするのじゃ、哀れな男よ。

エムベドクレス ではなぜしずめてくれぬ、その力もないのか？

マーネス われらはどうなるう？ おまえにはしかとわかるのか？

エムベドクレス あなたならいつてくれるな、なんでもおわかりだか

らな！

マーネス 言葉はつつしもう、おお、せがれよ！ そして常に学ぶとじゃ。

エムベドクレス かつてはあなたが教えてくださった。きょうはわたしから学ばれよ。

マーネス いうべきことは、それですべてか？

エムベドクレス おお、とんでもない！

マーネス で、もう行くのか？

エムベドクレス まだ行きはしない、おお、ご老体！ この緑の大地から喜びを味わう間もなく、わが目をひきはなすわけにはいかぬのだ。もうしばらく考えてみたい、すぎ去った日々を、青春の友らを、なつかしいあのものらのことをな、いまは遠くヘラスの街に楽しくおるが。またわたしを呪ったあの男のこともな、ああなるしかなかつたのだ。

いまはそっとしておいてくれ。陽が沈んだら、また顔をあわせよう。

訳者あとがき

これはヘルダーリンのドラマ『エムペドクレスの死』（一七九九）の抄訳である。

この未完のドラマにはほぼ三段階の稿がある。その全貌は現在、邦訳でもうかがうことができる（浅井真男訳・河出書房新社『ヘルダーリン全集三』谷友幸訳・岩波文庫）。

のこされた草稿から一篇の作品を再構成するのは、容易でもあり、むづかしくもある。容易であるというのは、ドラマの筋がすでにほぼままっているからである。

神々と疎遠になったアグリゲント市民のまえに、エムペドクレスは神そのもののようにあらわれる。市民らは熱狂する。しかし一方で自らを神とみなし、神を汚したという罪の意識のため、やがてエムペドクレスは失意におちいり、他方、司祭は彼のふるまいに僭主への欲望を見てとり非難する。司祭と執政官は民衆をそそのかし、ついにエムペドクレスを街から追放する。しかし孤独はかえって彼の失意をなだめ、苦悩を癒した。彼は死において天地とひとつになろうとする。後悔し、あとを追ってきたアグリゲント市民をまえに、エムペドクレスは大いなる和解と祝祭のことばを語る。つぎの日、彼はエトナの火口に身を投げる。

だが問題は、第一、二稿と第三稿とのあいだに構想上、決定的な切れ目があることだ。この切れ目は両者を並びたせるのが不可能であると思われるほど深い。そのため、草稿ごとに全訳し、それぞれの断片性をあらわにし、段階のちがいを明示するという方法がまづ考えられる。これがいちばん無難だろう。その対極としては、それぞれの部分を集め、構成しなおし、一篇の作品を作ることが考えられる。

ここでとった方法は、いわばその中間である。三種類の稿から任意の部

分をえらび、並べてみた。この編集は発展の段階を示しもしないし、構成された作品を提供もしない。並列というゆるやかな組立てに、すべてはゆだねてある。

「酔いしれた民衆の騒ぎを背景に」は第二稿から、「喪失」「和解」は第一稿、「白鳥の歌」は第三稿から、それぞれ訳出した。全体をととのえるため、必要最小限の改変はほどこしてある。

テキストはシュトゥットガルト版によった。（Hölderlin, *Sämtliche Werke*, Bd. 4, W. Kohlhammer Verlag 1961）またフランクフルト版も参照した。（Friedrich Hölderlin, *Sämtliche Werke*, Bd. 12 / 13, Roter Stern 1985）